

未熟の回復

2020年

ワークショップ + テキスト・インスタレーション(つや消しの灰色に塗装した壁に、光沢のある銀のカッティングシート)

テキストサイズ可変(TOKAS本郷では約600x420cm)

TOKAS本郷(東京)でのプロジェクト『追熟と訛り:未熟の回復と鮭の遡上』の一部として

動く人々の経験する文化と言語の翻訳について考察するプロジェクト『追熟と訛り』を、自分がよそ者となる環境(フランス、スウェーデン、オーストリア、南アフリカ、ラトビア、ロシアなど)で2018年から展開してきている。今回はコロナ禍というこれまでに経験のない状況を新しい「客地」で、『未熟の回復と鮭の遡上』をテーマに試行を重ねた。

そのうちの一つ、『未熟の回復』は変わるものと過去のあいだの距離を反芻する。パニック障害と網膜剥離を患い、日常を喪失した経験を持つ日本の書家との対話とワークショップをオンラインで行った。その現れのひとつとしてのテキスト・インスタレーションは、どこかから差す光を反射することでその姿をあらわにし、変容を続ける。

母語との隔たり

「自分のことばにたどたどしさを取り戻す」。このひと言は、母語から離れて築き、かつて過ごした環境に身を置いて気付いた「隔たり」と心情を喩えている。この言葉の組み合わせが意味するのは、自分のものであるはずの言語においてぎこちなくなり、よろめいてしまうこと、また、その言語を新鮮な眼で見れる状態になるということでもある。

変調 - 異常/不調/混乱の予後

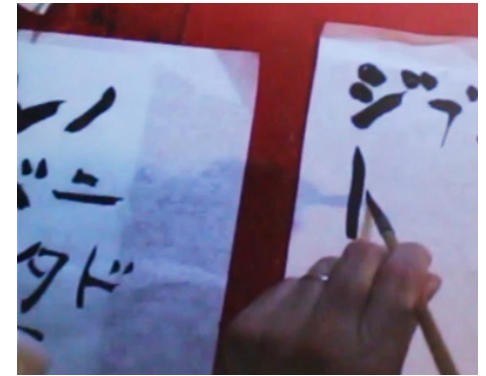
このひとことを下地に、京都とストックホルムを結び、網膜剥離の術後間もない書家の神郡宇敬とオンライン・ワークショップを行なった。「新しい生活」を問うと、不意にさまざまなものが受け入れられなくなったパニック障害や、視界が歪み、狭まり、遠近感が掴めなくなった網膜剥離という日常を失う体験が明らかにされ、書くことや教えること、そして生活が一変する体験のもたらした目覚め、モノやコトの現れとその捉え方について話が展開した。

変容する自己、過去との距離の省察や、その途上で得た「囚われない」感覚を踏まえて、このひとことをどのように体現するか。左手、横書き、カタカナなど普段の「なれ(慣れ、熟れ)」から離れたかたちを採り入れながら、いくつかの試行を行なった。

反映に見える

試みの一つでは、利き手ではない左手に筆を持ち、文の意味を無視して音韻のみを伝えるカタカナを用い、節に関係なく五文字四行で区切り、縦でなく横書きに、といくつかの変則を取り入れた。

TOKAS本郷での展示では、この試みの書を光沢のある銀色のカッティングシートの文字に変換し、展示室内の別作品(『文字の動き』)の映像投影のため、つや消しの灰色に塗装した壁に設置。そのメタリックな表面は壁のわずかな凹凸を反映して波打ち、投影の光を受けてチラチラと揺れ、「ジブンコ トバニタド タドシサヲ トリモドス」という文字の集合体を闇の中に浮かび上がらせる。



(左頁) テキスト全体のインスタレーション風景 (右頁、上から) ワークショップでの書道実践の様子; 滲みや擦れなども含めて、筆の動きの跡をたどり、プロジェクションと壁の凹凸のある風合いを反映するカット文字; 展示空間にある別作品のプロジェクション用スクリーンに見えるインスタレーション風景

